

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

第43回 ジャパンホームショー

2021年11月17日(水)
～19日(金)、東京ビッグサ
イト(東京都江東区)において
住宅・建築関連専門展示会
「Japan Home & Building Show
2021」が開催された。全国タイル工業組
合が出展するブース「CERAMIC TILE
PLAZA(セラミックタイルプラザ)」を紹介する。

開催

2022年は「タイル名称統一百周年」!

1922(大正)年4月12日、それまで敷瓦や化粧煉瓦など、複数
あった名称が「タイル」に統一された。来年は100年目となり、
「タイル名称統一百周年」と銘打ち、様々な催しを開催予定。展
示ブースの正面は、そのロゴマークをあしらったデザインに。

「タイル名称統一百周年」
特設サイト

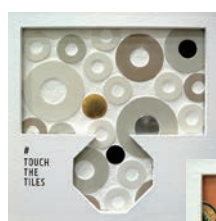
公式サイト <https://touchthetiles.jp/>
Instagram <https://www.instagram.com/touchthetiles/>



アンケートに回答した方に「タイル名称統一百周年」のロゴ入りエコ
バッグを贈呈。夕方には一日の配布分がなくなると人気ぶり。



タイルの歴史を解説するコーナーでは、瀬
戸の本業敷瓦や、和製マジョリカタイルの
実物を展示。



タイルで新たな価値を創造

展示会場は、「西ホール」。新型コロナウイルスの感染状況も落
ち着き、会場は例年に近いにぎわいを見せた。

ブースの正面には、布素材にデザインをプリントしたものを使
い、やわらかで清潔感のある印象。白を背景に、様々な形状の色
とりどりのタイルが際立ち、写真におさめる人の姿も多く見られた。

展示テーマは「Tile Renovation ~Rediscover and
Create 隠れた魅力を再発見し 新たな価値を創造する」とし、タ
イルを使用した建物の再生を提案。近年のキーワードとなってい
るSDGsやDIYも意識された。会場ではDIYで店舗を再生する動
画を流した。

ロゴマークの形をした窓から、色とりどりのタイルが
顔をのぞかせる。

#TOUCH THE TILEをつけ、SNS投稿を促した。

例年Q-CAT(外装タ
イルと有機系接着剤の組
合せ品質認定制度)の
周知に努めるQ太くん
も、今年はリーフレット
を手に、タイル名称統
一百周年をPR。

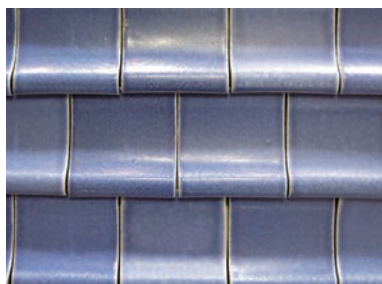


CERAMIC TILE PLAZA



全国タイル工業組合の出展ブース「CERAMIC TILE PLAZA」では、組合員各社の24社34枚の新作タイルパネルを展示。展示テーマの「リノベーション」にちなみ、壁はコンクリート調にし、多種多様なタイルが古い建物に魅力を添えるイメージを演出した。

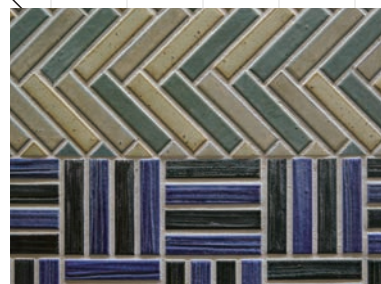
各社
パネルの
紹介



エクシズ
「瓦」



オザワモザイクワークス
「オールクラブ六兵衛」



各務製陶
「ハーフボーダー」



カネキ製陶所
「古窯変 波紋」



三協製陶
「ジュート」



杉浦製陶
「ヘキサグレイズ」



鈴製陶
「稀彩 2021」



セラメッセ
「ピュアンテ」



玉川窯業
「クラッシュタイル 無釉」



長江陶業
「ロンプス」



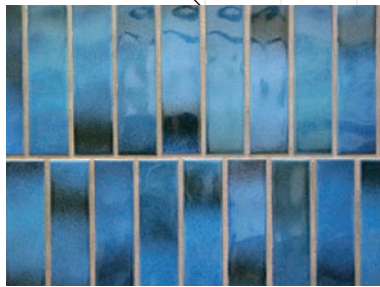
名古屋モザイク工業
「スプモーネ」

質感も
違います！





ニッタイ工業
「リコッタ」



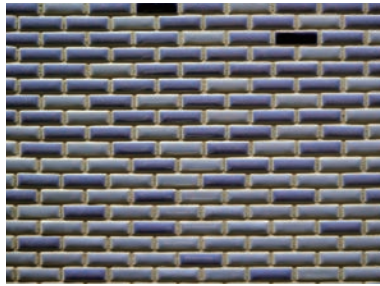
日東製陶所
「ムーラン」



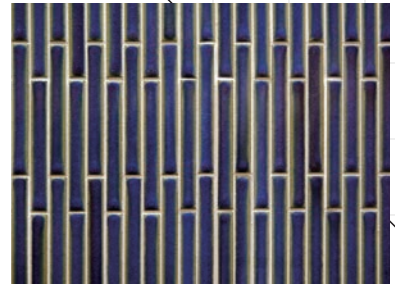
丸万商会
「TANTO」



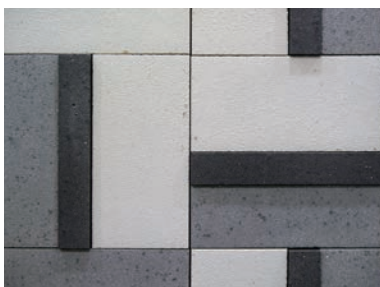
丸仙化学工業所
「グレイズチョーク かまぼこボーダー」



山周セラミック
「Cスレンダー」



山延製陶所
「ストリート」



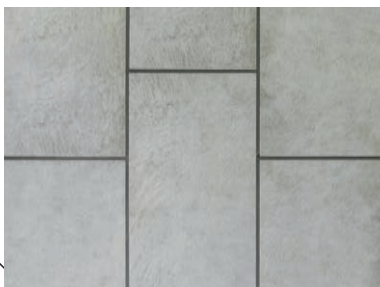
Danto Tile
「TPR-100/400/500」



KYタイル
「ノベルウッド」



LIXIL
「美釉彩(びゅうさい)」



TChic
「シャルムウォール」



TNコーポレーション
「ST-010」

ご近所ブースミニレポート



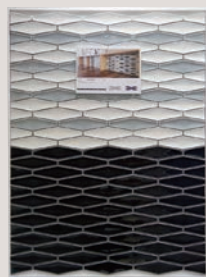
「淡路瓦工業組合」では、藍染め瓦が目を引いた。

「庵治石開発協同組合」では、庵治石柄のオリジナル布でつくられたテディベアが。

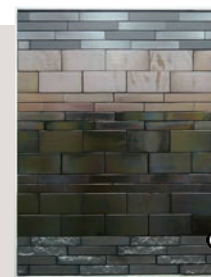
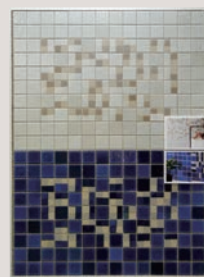


人気の タイルは？

来場者に実施したアンケートでは、「ロンプス」が一番の人気。「角度による光沢感がきれい」「形状とテクスチャーが良く、汎用性が高い」「非日常を演出できそう」とのコメントが寄せられた。次に「TANTO」「稀彩」が続いた。



「ロンプス」(長江陶業)



「稀彩」(鈴製陶)
「TANTO」(丸万商会)

パネル全体を
ご紹介！



藤森照信と モザイクタイル ミュージアム

こんもりとした山のでっぺんに松の木が生える——。誰しもを驚かせ、わくわくさせるミュージアムの建物は、藤森照信氏の設計・監修による。5周年記念展の第2弾(～1月10日まで)では、構想から完成に至るまでを振り返る。11月14日に開催された藤森氏の記念対談と記念展の様子をレポートする。

記念展: スケッチでアイデアの変遷を知る

記念対談の開催日は小春日和となり、青空にミュージアム外壁の黄土色と植栽の緑色が美しく調和していた。

午前中に記念展へ。最初に目にするのが藤森氏によるイメージスケッチの数々だ。ボールペンで描かれ、その脇にはメモ書きも。アイデアの変遷を見るのも楽しく、中には「空中に浮かぶ展示室」案もあって驚いた。アイデアが生まれては消え、あるいは進化して今の形にたどりつく。そんな創作の過程がいきいきと伝わってくる。

踊り場の展示空間モックアップ(模型)や、4階のタイルスグレの試作といった展示物もあり、施工段階の職人たちの奮闘を伝える。建物が完成するまでの経過をイメージ段階から試行錯誤も含めて知ることができる展示は貴重。多くの人の力と知識が結集してこの建物が生まれたことを改めて実感した。

対談会場は満員御礼!

記念対談の開演は13時30分。コロナ禍で2カ月延期し、幸いにも状況が落ち着いた中での開催となった。会場はミュージアムに隣接する笠原中央公民館・アザレアホールで、座席を半数に減らし、定員300名は満員御礼。

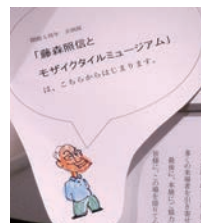
最初にミュージアム館長・水野雅樹氏が挨拶。開館



◀モザイクタイルミュージアム模型。
記念展に合わせて藤森氏が制作/個人蔵/2021



◀藤森照信スケッチ(紙)/
茅野市美術館蔵/2012



藤森氏のイラストが
会場を案内。



©Yuna Iwase

藤森照信 Fujimori Terunobu

建築史家、建築家。1946年長野県生まれ。専攻は近代建築、都市計画史。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。91年、「神長官守矢史料館」で建築家としてデビュー。

以降5年間で、62万人の来場者があったことへの感謝を述べた。続いて多治見市長・古川雅典氏が挨拶。個性的な外観イメージに、当初は反対の声が上がったことを明かし、開館後の盛況ぶりに、反対者たちも賛成に転じたと力を込めて語った。

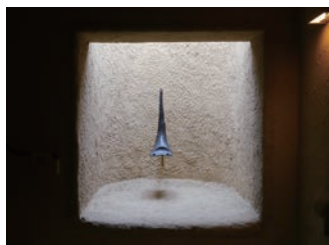
対談一部: 路上観察と多治見とやきもの

記念対談は二部構成。一部は安藤雅信氏(陶作家、ギャラリーももぐさ主宰)が対談相手を務めた。路上観察学会(*)のメンバーとして、藤森氏が20年も前に多治見を訪れていたことを知る。続いて2008年の国際陶磁器フェスティバルに関連した「土」をテーマとする展覧会や、美濃焼の歴史について語られた。

そこで話題の主軸となったのが、「感覚を通してしか理解できないもの」について。ヨーロッパでは言葉で説明を尽くそうとするが、たとえば日本の禅や茶道にははっきりとした方法論がなく、言語化・理論化できないところに核心があり大きな魅力がある、と藤森氏。

安藤氏との対談では、路上観察学会の写真や、土をテーマとした作品が映し出された。

*路上観察学会: 1986年、赤瀬川原平氏や南伸坊氏らと発足。張り紙やマンホールなど、路上を歩いて観察できるすべてのものを対象とし、面白さを見出した。



伊藤慶二氏の作品
「そく」。大階段の
アルコーブ(くぼ
み状の部分)に浮
かぶように展示さ
れている。





ワイヤー外形試作再現

緩やかなカーブを描き、外へ向かって広がっていくような「タイルスグレ」の外形を作るために縮小サイズでテンションのかかり方などの確認が行われた。



外壁の構造(工程順)

下地の上にタイルを張り、樹脂で表面の状態を整えてから刷毛で土を塗ることで、土壁風の雰囲気を出している。現在の状態になるまでに何度もモックアップが作られた。



ストライプ漆喰モックアップ再現

1階の待ち合い付近の壁面には、ランダムに幅を変えた漆喰のストライプが施されている。



タイルのスグレ試作再現

ワイヤーにタイルを固定するという経験のない工事のため、試作で安全性、耐久性などの確認が行われた。

＊制作はすべて(株)吉川組／2021



左)正面入り口が小さい理由について、「狭いところから入るほうが、気持ちが改まる」と藤森氏。

右)4階の天井から下がるタイルスグレ。クモの巣が朝露に濡れてきらきらするイメージで制作。

「言葉というのは素晴らしい。光みたいなもの」とその力を認めつつ、「言葉の光にはものすごく殺菌力があるので、発酵中のものが死んでしまう」と、創造における言葉の危険性を指摘。「自分のやっていることを理論化すると、大事なところが抜けてしまう気がする」と話し、ミュージアムの構想ではイメージをスケッチで視覚化していくうちに言葉や理論が浮かんできた、と説明した。

一方、建築史家としては、「建物の印象を言語化する訓練を本気でやってきた」とその矜持を語った。「その建物のよさをちゃんと言語化できたら自分の勝ち。圧倒されて言語化できなかったら自分の負け。相撲を取るように建物を見てきた」とは名言として、強く心に残った。

対談二部:

モザイクタイルミュージアムの建築をめぐる

二部は村瀬良太氏(建築史家)が登壇。氏は記念展に合わせて制作された冊子でインタビューの聞き手を担当。対談はその内容を掘り下げるものとなった。

印象的だったのが、正面のすり鉢状のアプローチが「巨大な足が踏んでへこんだ形」を表現していること。これは館内で展示している作品の作者である伊藤慶二氏が「祈りと足」をテーマに創作をしているこ

となどからヒントを得たという。また、外壁や階段に塗られた「土」についても言及。「土は本質的に人間を無意識にさせる力、意識を吸収する力があるんです」と藤森氏。生命は土から生まれ土に還る。ミュージアムが「可愛い」だけでなく、不思議な存在感を放つのは、祈りや土といった根源的なものが含まれているからなのだった。

対談の終盤ではタイルについて語られた。「タイルを使うことが一番難しかった」「タイルはあまり好きじゃなかった」との率直な発言に会場から笑いが起こる。考え抜いて、外壁には割ったタイルや茶碗を所々に張ることにしたが、「新しい使い方が提案できないか」と思って生まれたのが4階のタイルスグレだという。天井の開口部も含めたこのアイデアは外観と同様、驚かされたろうが今や人気撮影スポットとなっている。

ほかにも建物の緑化など話題は尽きず、対談は終了予定時間を30分過ぎて終了した。

会場を出るとすでに日は落ち、薄暮を背景にミュージアムは空から降り立ったUFOのよう。そんな姿を前にバスを待ちながら展示や対談の内容を反芻していると、藤森氏の言葉が思い浮かぶ。「あと10年か20年経ったら、いつ建てられたのか、昔のものか、今のものか、わからなくなる。そういう安定状態が早く来るといいなという感じがしています」。時が経ち、建物が変化していくさまを見ていきたい。



夕闇の中に佇むミュージアム。



村瀬氏との対談では、ホワイトボードを使って解説がされた。

冊子「藤森照信とモザイクタイルミュージアム」



対談の動画をYouTubeチャンネルにて公開中(2022年1月中)

<https://youtu.be/3JAOOy-1OAK>

INAXライブミュージアム企画展 壮観!ナゴヤ・モザイク壁画時代

INAXライブミュージアム「土・どんこ館」では、名古屋とその周辺のモザイク壁画を取り上げた企画展を開催中(～2022年3月22日(火)まで)。身近にあるゆえ見過ごしがちなその魅力と価値に、いま改めて注目する。



立体的なパネルがモザイクのかけらのように展示された会場。手前は旧中日ビルの天井画「夜空の饗宴」の一部。制作を手がけたのは矢橋六郎氏。家業の矢橋大理石商店に力を注ぎながら、生涯で120を超えるモザイク壁画・装飾を制作した。



大理石やガラスの無数の小片、タイルを用いて描くモザイク壁画。高度経済成長期である1950年代後半～70年代に、ビルや駅構内などを美しく彩った。とくに名古屋界隈では、モザイク壁画の立役者となった矢橋大理石商店(現・矢橋大理石、岐阜県大垣市)の存在や、常滑や瀬戸、多治見などやきものの産地に近いかもあって数多くが制作された。

当時のモザイク壁画は、今も目にすることができるが、その数は減りつつある。「建物が建って50～60年が経ち、建て替えの時期がきているものもあります。壁画は建物と運命をとにもするため、失われるものも少なくありません」と、展示を担当した寛 天留さん。紹介するモザイク壁画は8名の作家による17作品。そのうち現存するのは12作品で、「ぜひ実物を見に行ってみてほしい」と力を込める。

ただ、建物が解体となった場合でも、幸いにして別の建物に移設されて残る壁画もある。また、一部が保存されるケースもあり、会場には3作品から5点が展示されている。

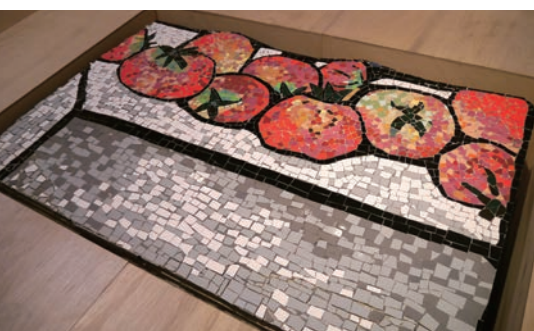
巨大な壁画の迫力は失われるものの、一つひとつのかけらの素材感、大きさが一律ではないことや、多様な色を組み合わせていることなどが見て取れるのは、一部分に注目して見る利点と言えるだろう。

その緻密で膨大な手作業を思うと、圧倒されるものがある。まさに豊かな時代だからこそ生まれた、贅沢な芸術作品なのだ。

企画展では「ナゴヤの主なモザイク壁画30」としたMAPも制作されている。身近にある芸術作品に、今こそ会いに行こう。

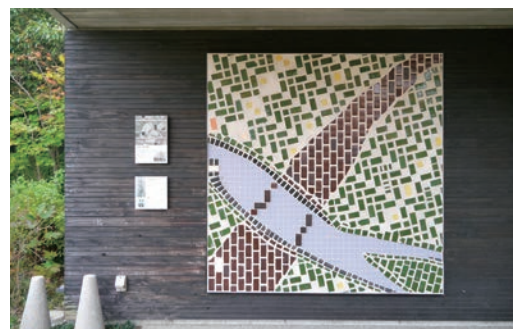


旧ホテルナゴヤキャッスルの壁画「昼と夜の対話」の一部。可愛いモチーフ、暖かみのある色合いが目をひく。

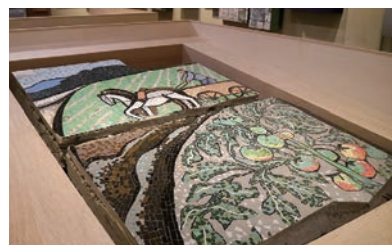


旧カゴメビルの壁画「TOMATO」の一部。2020年に解体し、INAXライブミュージアムに寄贈されたもの。

保存にあたり、下地を約15cm厚のコンクリートで補強。



旧丸栄百貨店本館の西側壁面の一部(復元)は、テラコッタパークに常設展示されている。いったんタイルをはがし、元のとおりに復元した。会場ではその様子を映像で紹介。



INAXライブミュージアム

愛知県常滑市奥栄町1-130

開館時間 10:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 水曜日(祝日の場合は開館)、
12月27日(月)～2022年1月5日(水)



企画展開連冊子「壮観!ナゴヤ・モザイク壁画時代」
モザイク壁画MAPも掲載!LIXIL公式オンラインショップで購入可。

「タイルデザイン甲子園」優秀賞のタイルを試作！ ～国際陶磁器フェスティバル美濃'21～

9月30日(金)～10月17日(日)、国際陶磁器フェスティバル美濃'21が開催された。同イベントは3年に一度開催する世界最大級の陶磁器の祭典。メインとなる「国際陶磁器展美濃」は世界中から作品が寄せられるコンペティションで、陶磁器デザイン部門の審査員長にはモザイクタイルミュージアムを設計・監修した藤森照信氏が就任。また、会場デザインの監修も担当した。

併せて実施された「未来のタイル・コンペティション」では小学生から高校生にタイルのアイデアを募集。高校・高専部門「タイルデザイン甲子園」では、審査により優秀賞2作品を決定、試作品が製作された。小・中学生部門「キッズ・コンペ～君の描くみらいのタイル～」では人気投票によりグランプリ、金賞を決定した。

全作品はWEB展示会にて公開中。また、2022年1月14日(金)～1月30日(日)の期間、モザイクタイルミュージアムにて優秀賞の試作品などを中心に応募作品展を開催する。



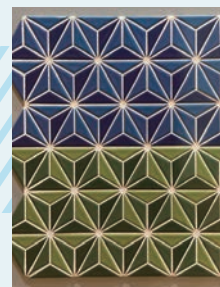
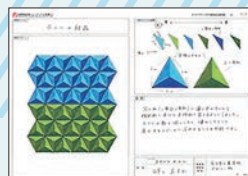
銀賞(陶磁器デザイン部門ファクトリー分野)を受賞した「檜木町長屋のタイル」(作者:studio record/宮部友宏さん)。会場デザインのテーマは「木と緑とやきものの空間」。苔や草木が展示空間を飾った。

「未来のタイル・コンペティション」 高校・高専部門「タイルデザイン甲子園」

優秀賞2作品については、試作品が製作された。

タイルの結晶

作者:畔上あすかさん



WAVE

～装飾とユニバーサルデザインの融合～

作者:中丸銀河さん



WEB展示会 <https://www.icfmino.com/outline/event/detail.php?id=67>

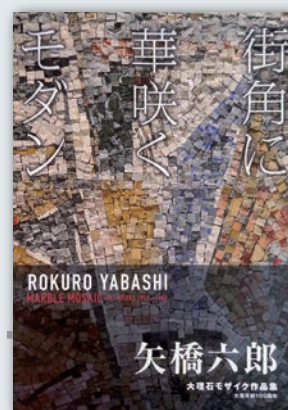
「矢橋六郎 大理石モザイク作品集 ～街角に 華咲く モダン～」

「壮観!ナゴヤ・モザイク壁画時代」展(6ページ)でも紹介されているモザイク作家、矢橋六郎氏の作品集が発行された。氏の出身地である大垣市が2018年に市制100周年を迎え、また同年が氏の没後30年であることを記念し大垣市が制作。2020年に完成した新市庁舎には、矢橋氏が手がけた壁画「西濃の四季」が旧市庁舎から移設された。

作品集には94作品を紹介。作品設置マップも掲載され、壁画巡りにも重宝する。「読み応えがある」「作品を現地で見学したい」などと好評で、先日増刷がされた。

(A4版/156ページ/価格2,000円)

*大垣市教育委員会文化振興課の窓口にて販売。郵送希望の場合は電話(0584-47-8067)で申し込み。



モザイクを楽しむ2冊

「MOSAÏQUE」

世界で活躍する80名の現代モザイク作家を紹介する本がフランスで発行された。発行元はモザイク雑誌を年2回発行するMosaïque Magazine社。世界のモザイクアートの最先端を知ることのできる資料としても貴重な一冊。日本人作家5名が紹介されている。

(216×266mm/312ページ/価格49ユーロ)

*注文は出版社のウェブサイト(フランス語)より。

<http://www.mosaicquemagazine.com/>

